

## **On the Development of Casa, a Student Commons in the Faculty of Humanities**

ESAKA Yukiko  
TAMURA Yuka

---

This article reports on the activities carried out by students and faculty in 2019 in Casa, a student commons in the Faculty of Humanities at Kyoto Seika University.

In 2018, volunteer students and teachers of the Faculty of Humanities worked together to create Casa, a student commons with the aim of promoting more active student participation in campus life and more opportunities for learning and exchange. In 2019, when the location of Casa was moved to Ryūkeikan where faculty offices are located, new student staff and faculty members continued to revise and develop the program of activities

One of the major changes brought about by the move is that the activity space was divided into two rooms, one of which serves as the Student Commons where students (Room R101) can eat and talk freely; the other serves as the Humanities Library (Room R119) where students can eat and drink but are not allowed to talk, thus securing a space where a quiet study environment can be maintained. In accordance with these changes, the student staff members were divided into two groups: one group was mainly responsible for planning and implementing events, and the other was responsible for operating the Humanities Library. Student staff members would be trained to provide peer support. In addition, monthly “get-togethers” and other large-scale events helped raise awareness about Casa among students and faculty on campus and led to an increase in the number of users.

The problem was that the rooms were small and there was not enough space for students to work. It was proposed to expand the space for student activities. It is also necessary to enhance the content and space of activities. In the future, we would like to aim for regional cooperation.

## 人文学部スチューデント・コモンズCasaの展開

恵 阪 友紀子 ESAKA Yukiko  
田 村 有 香 TAMURA Yuka

### はじめに

京都精華大学人文学部では、主体的に活動する学生の育成、学生間の交流をより活発化させるため、2018年度より学部内にスチューデント・コモンズ Casa を立ち上げ、有志の学生と教員とが一緒になって活動してきた。2018年度の活動については、紀要52号、53号で報告してきたが、本稿では2019年度の活動について報告し、今後の在り方を検討するものである。

2018年度には、清風館地下スペースを活用し、中心となって活動できる学生の育成、地下スペースでのカフェの実践などを通して学生間、また学生と教員との交流を図ってきた。2019年度には人文学部の学生が自由に使えるスペースが流溪館に移ったことで、活動方針も変更し、新たな学生スタッフ、担当教員で活動を進めていくこととなった。

清風館地下で活動していたときは、大きな一つのスペースであったため、ミニイベントや自由に過ごせるスペースとして使いたい学生と、静かに勉強したい学生との間に溝があり、不満も出ていた。流溪館に移るに当たっては、二部屋に分散したことで、片方をスチューデント・コモンズ（R101教室、以下適宜「コモンズ」と略称する）として食事はもちろん自由に話し合える場所とし、もう片方は人文ライブラリー（R119教室）として飲食は可能としつつも会話は禁止とし、静かな学習環境を保つスペースとして活用した。

これに合わせて学生スタッフについても、主にイベントを企画実践するイベント担当と、人文ライブラリーの運用とピア・サポートのできる学生スタッフ育成を目的としたライブラリー担当に分けて活動することとした。

また、Casaの活動を周知し、スチューデント・コモンズや人文ライブラリーの活用を促すために、月例会や大型イベントなどを企画実践した。以下、これらの内容について詳述する。なお、本プロジェクトについては2019年度学長指定課題研究（学内のコミュニケーションを促進するプロジェクト）による研究助成を得ている。

### 1. 2019年度の活動概要・目標

2019年度の前期は活動場所の移転などがあったこと、活動の中心となる3年生スタッフが、前期はフィールド・スタディーズの期間であり、ほぼ学内にいなかったことなどから、前期はお試し活動期間とした。お試し期間の前期には、2018年度後期に活動した4年生4名、有志の2年生4～5名が中心となって新入生歓迎会を行ったが、新規スタッフの募集は7月に行い、本格的に活動を開始したのは10月の秋学期開始からとなった。

募集したスタッフには面談を行い、最終的に Casa スタッフとしては、学生16名（3年生1名、2年生9名、1年生6名）が参加することとなり、担当教員4名、職員1名の体制となった。なお、途中から3名（2年生1名、1年生2名）の学生が加わった。

Casaは主体的に活動する学生を育成することを目的としているものの、学生にとってもメリットになり、就職活動等で活用できるように活動内容を証明したスタッフ認定証を学部長名で発行することとした。

活動内容は、先にも述べた通り、学生間交流を目的としたイベントを企画実践するイベント担当と、ライブラリー整備とピア・サポートを目指す学生スタッフの育成を目指すライブラリー担当に分け、それぞれに担当教員が付いて活動をサポートした。

## 2. 活動記録

### 2-1. 月例会（囲む会）

2018年度には一部学生の間ではCasaの活動については知られるようになったものの、学生だけでなく、他の教員の間にも活動が浸透しているとは言えない状況であった。

新しく活動場所となった流溪館は、教員の研究室のある建物でもあることから、Casaの周知と学生・教員間の交流を図ることを目的とした月例会を企画した。それぞれの教員の専門分野を中心に、授業では聞けない内容を楽しく語る「先生を囲む会」を毎月1回を基本に、スチューデント・commons等で実施した。

#### ◆白井先生・柳沢先生と元号を考える会

5月17日（金）4限 流溪館commons

元号が令和に変わったことを機に、これまでの改元の歴史や意味について歴史専攻・社会専攻の観点からのレクチャーを聞き、今回の改元の意味を参加者全員で考えた。



写真1 元号を考える会

#### ◆是澤先生・恵阪先生と新元号を考える会

5月24日（金）4限 黎明館L202教室

これまでの元号の出典と、新元号令和の出典の違いについて文学専攻の観点からレクチャー・対談を行った。

#### ◆新任の先生（吉永先生）を囲む会

6月12日（水）5限 流溪館commons

吉永先生の専門である中世史や研究テーマなどについて話を聞くことで、学生が新任の先生のことを知る機会を設けた。

#### ◆柳沢先生と精華の古代遺跡を訪ねる会

7月1日（月）3限 流溪館・窯跡

学内にある平安時代の窯について、その歴史的意義のレクチャーを受け、実際に遺跡の見学をした。

#### ◆恵阪先生と貴船の文学をたどる会

7月14日（日）13時～17時

貴船神社周辺散策

貴船周辺を舞台とした文学作品をとりあげ、作品を觀賞しながらフィールドワークを行った。



写真2 貴船の文学

#### ◆小倉先生と消えた送り火を語る会

7月18日（木）5限 流溪館commons

現在残っている五山の送り火以外にも行われていた送り火についてレクチャーを受け、送り火の歴史についての理解を深めた。



写真3 送り火を語る会

#### ◆新任の先生（久留島先生）を囲む会

9月25日（水）17時～18時 流溪館

久留島先生の専門である中世文学や研究テーマなどについて話を聞くことで、学生が新任の先生のことを知る機会を設けた。

#### ◆ビブリオバトル地区予選会

10月24日（木）4限 流溪館commons

学外や他学部からの参加者も募り、ビブリオバトルの地区予選を行った。



写真4 ビブリオバトル

◆恵阪先生とかるた大会

11月27日（木）5限 流溪館コモンズ  
百人一首の歴史を学び、江戸時代のかるたを用いてかるた大会を行った。

◆前田先生とアロマキャンドルを作る会

12月20日（金）3～4限 流溪館コモンズ  
学内に自生するペパーミントを収穫し、アロマオイル抽出のワークショップを行った。

◆申先生と愛を語る会

12月26日（金）5限 流溪館コモンズ  
「日本に愛という概念があったのか」「恋と愛はどうちがうのか」などについて参加者全員で意見交換をした。

◆藪内先生と珈琲を語る会

1月24日（金）3限 流溪館コモンズ  
コーヒーの知識についてのレクチャーを受けた後、実際にその場でコーヒーをいれて全員で試飲した。



写真5 珈琲を語る会

2-2. 新入生歓迎会

毎年恒例になっている人文学部新入生歓迎会を5月28日（火）の18時～20時ごろに実施した。火曜日

5限には必修の授業があり、ファシリテータとして授業に参加している上級生が新入生を歓迎会の会場へ誘導したことで、新入生の7割に当たる80名ほどが参加した。

当日までの準備として、4月末から週1回のミーティングを行い、教員へのカンパの依頼、歓迎会での料理、ビンゴゲームの準備などを行った。

当日は、食堂（悠々館）1階のレセプションルームを主会場とした。2019年度は1年生が120名ほど多いことから、料理は食堂に発注し、たこ焼きのみ学生がその場で料理することとなった。

ファシリテータやCasaスタッフが積極的に1年生に話しかけ、食事やビンゴで盛り上がったことから、打ち解け合うことができた。



写真6 新入生歓迎会

2-3. 留学生交流会

留学生との交流の場を持つことは、学生スタッフの強い希望であった。どのような形で進めるかの議論を重ねた結果、会話を弾ませるためには食べるものがあつたほうがいいというのが共通した意見であった。実施時期は12月を予定していたため、留学生には出身国のお祝いの料理、日本人学生には地元のお雑煮を作って振る舞うことになった。

キムチ鍋（韓国）、辣子鳥（中国）、バウルサック（カザフスタン）、ベトナムコーヒー、<sup>いな</sup>猪むどうち（沖縄料理）、たこ飯、四国風お雑煮、京風お雑煮、たこ焼きなど、多彩な料理を用意した。また、恒例のビンゴゲームも行った。

実施日は12月6日の17時半～20時ごろ、場所は食堂のレセプションルームを利用した。材料費は教員からのカンパでまかない、ビンゴゲームの景品も教員に協力してもらった。

当日の参加者は50名強であったが、食堂を利用したことで、通りすがりの他学部の学生・教職員など、多くの人が飛び入りで参加し、大いに盛り上がった。



写真7 留学生交流会



写真8 大学生生活と就活を考える会



写真9 先輩と就活を語る会



写真10 人文ライブラリー

#### 2-4. キャリア支援イベント

2019年度には新たに、キャリア支援にも取り組んだ。キャリア形成が学生の入学時からの大きい関心事の一つであるにも関わらず、例年キャリア支援チームが実施する就活イベントへの人文学部生の参加率は低く、人文学部生が気軽に参加できる就活イベントの実施は継続的な懸案になっている。

2019年6月17日には、「大学生生活と就活を考える会」として、ワークシートなどを利用した自分の特性把握や就活に向けての心構えなどをレクチャーした(担当は服部静枝)。1年生を中心にアナウンスを行い、15名の参加があった。

2020年1月20日には、4年生の就職活動経験者4名と卒業生1名を講師として迎え、これから就職活動が本格化する3年生と、2年生を対象にキャリアイベント「先輩と就活を語る会」を行った(担当は服部静枝)。3年生から4名、2年生から4名の参加があった。就活経験者を囲んで和気あいあいとした雰囲気の中にも真剣なやりとりがあり、参加者からは「機会があれば参加したい」という感想が寄せられた。

#### 2-5. ライブラリーの運営

流溪館R119は人文ライブラリーとして通年利用した。ライブラリーの蔵書については、2018年度に作成(担当:木川田明美、佐々木美緒)した蔵書リストをもとに管理している。また、R101(コモンズ)とは異なり私語禁止がルールなので、静かな環境で学習に打ち込みたい学生たちが日常的に利用している。また、ソファを2台設置し、ゆっくりと本が読める環境も提供している。

2019年度の最も大きな成果は、情報館との連携である(担当:佐々木美緒)。後述する「違法薬物を考える会」の関連では、情報館の資料から、違法薬物に関するパスファインダー(Pathfinder)を学生が中心となって作成した。

2019年の年末には、1年生の専攻選択(文学、歴史、社会)のタイミングで、各専攻の推薦書籍についての情報を教員から集め、それをパンフレットにまとめたうえで、初年次演習を通じて1年生に配布した。またこの情報は、情報館でも展示テーマとして採用され、「人文ライブラリーで3専攻の学びが一目でわかる企画展」が行われた。



写真11 ライブラリーでのパネル展

## 2-6. 大学行事・学部行事との連携

2019年4月には、オープンキャンパスに向けた人文学部の学びの紹介とCasaの活動紹介を兼ね、3年生前期に人文学部学生全員が行うフィールドワークの成果をまとめたパネル展を人文ライブラリーにて開催した。当日は人文学部関連施設として、スチューデント・コモンズとともに見学者に開放し、Casaの教員やスタッフの学生が説明を行った。

その他にも、オープンキャンパスやwebオーケインなどの機会には積極的にCasaのスタッフ学生を派遣し、学部の学びについて参加者に説明を行っている。

## 3. 違法薬物を考える会

本学の学生が大麻所持で逮捕された事件から、学生の中に違法薬物に対する関心が高まったことを受け、Casaと京都精華大学違法薬物に関する対策委員会の共催で、大麻に関する啓発イベント「第1回違法薬物を考える会」を行った（2019年11月26日）。当日は京都府健康福祉部薬務課から中川拓也氏をお迎えし、Casaの教員と学生が進行を担当した。Casaで配布したアンケートの回収数は43件であった。アンケートの主な分析結果は表にまとめる。

表1 第1回違法薬物を考える会 アンケートの主な結果

<ul style="list-style-type: none"> <li>・違法薬物について絶対に使用すべきではないという回答は7割</li> <li>・「自分とは関わりのない他人事」と思えない人が9割</li> <li>・大学として、学生への説明も社会への説明も足りていない</li> <li>・違法薬物に関する授業や講習会が必要と考える人が9割</li> <li>・違法薬物は身近にある。使用に興味がある人は4割、身近な人の所持を耳にしている人が3割、実際使用を誘われた人が5%</li> <li>・違法薬物が簡単に手に入ると考えている人が過半数</li> </ul>
--

開催の経験やアンケートの結果を踏まえ、第2回違法薬物を考える会はCasaとは切り離し、学部横断的かつ事務局員も参加する実行委員会を立ち上

げ、そちらで運営するという方法をとった。違法薬物を考える会実行委員会は2020年度も活動を続けている。

## 4. 施設見学

スチューデント・コモンズおよびライブラリーの運営の参考するため、9月10日に近畿大学のアカデミック・シアターを見学した。Casa担当教員4名のほか、情報館スタッフ2名、学生スタッフ1名で訪問し、1時間半ほどかけて、アカデミック・シアターの杉浦氏に施設案内を依頼した。

アカデミック・シアターの図書部門では、学生ボランティア（登録者数30名、常時稼働者数10名程度）が、担当棚を持ち、テーマ展示や来館者の興味を喚起するメッセージをボードに記入している。また、アカデミック・シアター2号館では、在学生、卒業生、企業と交流できるオープンスペースで、“社会とつながる場”を提供し、企業と学生のコラボイベントなどが行われていた。

学生が担当棚を持って書籍を紹介する方法は人文ライブラリーでも実践できそうであった。「2-5. ライブラリーの運営」で触れたように、各専攻の教員から集めた推薦書籍をまとめ、その書籍を展示するなどの企画を進めている。

## 5. 2019年度の総括と次年度への展開

2019年度は教員と学生の利用頻度が上がった。これには、流溪館というほとんどの教員の研究室がある同じ建物だったこと、及び食堂の近くで学生の導線にも近かったことが大きく影響している。さらに2019年度のコモンズの稼働率を見ていると、適度に教員の目も届くフリーなスペースの必要性が明らかである。

教員のオフィスアワーだが、研究室には訪問しにくくてもコモンズでのオフィスアワーには気軽に学生が訪ねてきていた。

コモンズに人が集まることによって、知人学生あるいは教員を介しての人的ネットワークが広がるという効果が確認された。

次年度に向けての課題としては、さらにコモンズやライブラリーを活用する学生・教員を増やすこと、部屋自体は狭いので部屋の外や学校周辺のフィールドワークなども視野に入れ活動エリアを拡大すること、ゆくゆくは地域連携への発展も視野に入れることなどが挙げられる。

## おわりに

将来的には学生が内発的に活動を展開していくことを目指しているが、そこまでにはなおしばらく、教員によるサポートが必要である。2020年度は学生スタッフに加えてサポート教員もさらに充実し、引き続き人文学部学生及び教員のコミュニケーションを促進していきたい。